

今年も春を迎えました



新しい年度が始まり、5月1日からは元号も変わりますが、暮らしネット・えんはいつもと変わらぬ年度初めの日々。今年は10日もの大型連休ですが、暮らしネット・えんはいつもどおりに動いています。生活を支えるのが介護ですから、一日も欠かすことはできません。見回してみるとカレンダーどおりに休めない職種はいっぱいあって、おかげさまで日々の暮らしがつつがなく遅れているのですね。

私事ですが、1月末母が91才で亡くなりました。昭和2年生まれですから、昭和と平成をまるごと生き抜いたことになります。腰が悪い上に軽い認知症でしたが、それなりに元気に暮らしていましたが、昨年秋に緊急入院、回復は見込めないかもと言われながら2ヶ月で退院、自宅に戻ってからはショートステイを利用するようになりました。それまでは奨められても「どうして？ひとりでいられるのに」と拒んでいたのですが、今回はすんなり受け入れました。「行くのが（ショートステイに）今の私の仕事」とつぶやいていたそうですから、介護する妹への心配りだったのでしょう。人づき合いが好きな母は、利用者やスタッフともすぐに馴染みました。けれども年末に再度の緊急入院、再度の復活は叶わず1ヶ月後に旅立っていきました。

母は誰彼なくご飯を出すのが好きな人でした。親戚知人はもちろん、大学生の従兄弟たちは友人を引き連れて、中学を出て間もない魚屋のお兄ちゃん、焼いも屋のおじさん、近所に引っ越してきたばかりのご夫婦、いろんなひとが我が家の食卓を一緒に囲みました。そんな環境で育ててくれた両親のおかげで、ひととかかわる仕事ができているのかもしれない。

それにしても昔の話をもう少し聞いておけばよかった。高齢者がひとり亡くなると事典一冊分の知識が失われるといいますが、ほんとうにそのとおりです。とりわけこの年代は戦争を通過していますから、時おりびっくりするような話をしてくれました。女学校時代は戦争真っ最中、英語は敵の言葉だから入学して一学期で終わり、「I, my, me, you, your, youは知ってる」。学徒動員先のひとつにブドウの収穫があったというので、戦時中にのどかな話だと思っていたら、それはブドウ酒から取り出す酒石酸で潜水艦の水中集音機を作るためでした。ブドウ酒工場は空襲で標的にされ、付近がワインの海になったそうです。大正10年生まれの父は最も戦死者が多い世代ですから、私たちはあの戦争で生き残った若者たちの子孫なのですね。母自身は「今は逝くのが仕事」と言っているに違いありませんけれど、やはり淋しいものです。

(代表理事/小島美里)

